

北海道、東北、関東地方の家紋と
それを掲げた武将



—島津氏—【九州】

文字紋—丸に十文字—

【図柄】中国では十字は厄を除き、福を招く呪符で、蒸し餅の上に十字の印をつけて食したとされる風習が三世紀〜五世紀の晋の出来事を記した『晋書』に載る。その風習が日本に伝わると鎌倉時代に流行し、『吾妻鏡』では餅自体を「十字」と称して將軍家より下賜される様子が描かれている。現在最古とされるのは鎌倉時代初期の島津忠久着用の甲冑にある十文字紋で、『蒙古襲来絵詞』にも描かれる。



島津氏の家紋は「丸に十の字」である。しかし、昔は外郭の丸はなく、単に筆書体の「十」だけであった。すでに、先祖の島津忠久の甲冑に十文字紋があったといい、『蒙古襲来絵巻』にも久親・久長の兵船の幡に「十文字と鶴紋」が記されている。町時代になった『見聞諸家紋』に見える「十文字紋」は筆勢を残したものであるが、戦国時代後期の旗印は丸に十字紋が描かれている。江戸時代になって衣服などに紋を用いるようになると、丸で囲んだ幾何学的な「丸に十字紋」に落ち着いたようだ。その結果、轡紋であるとか、キリシタンに関わる十字架紋などと誤解されるようになったが、十字紋の成り立ちは轡紋・十字架紋とはまったく別のものである。

成り立ちについては諸説あるが、四の呪符説が正しいものであろうとするのが定説となっている。十字を切る行為が災厄を打ち払い、福を招くものと信じられたこと、山の神・狩猟神を祭る矢口餅の祭りに用いられたことなどから縁起のよい印として家紋に用いられるようになったと考えられる。島津氏がキリスト教などの入るずっと以前より十字紋を用いられていたことは史料にもある通りで、キリシタンであったからとか、十字架からとったなどという説は問題にならない。十字紋はもともと古い紋のひとつで歴史も古く、鎌倉時代には清和源氏の小笠原・逸見・田沢・志村の諸氏、藤原秀郷流の内藤氏なども用いている。十字紋は島津氏の一族も用いているが、宗家以外は十字の原形を少しずつ変えて用いたことから多彩な十字紋が生じている。

九州代表島津氏

島津氏は惟宗姓・源姓・藤原姓の三説がある。源頼朝の落胤説は、すでに江戸時代においても疑問視され、現在では単なる伝説とされている。信頼できるのは惟宗姓といえるようだ。今日、島津氏の出自として、通説的に考えられているのは、惟宗基言の子広言が、近衛天皇の時代、播磨少掾を辞して近衛家に仕え、近衛家領島津庄の下司となつて下向したのに始まるとされる。つまり、広言の子忠久が島津氏の初代になったとするものだ。ちなみに、播磨には島津氏が現在も残っている。忠久は頼朝から薩摩と大隅の守護職に補任され、のちには日向の守護職も得て、島津氏は南九州一の大族として歴史に名をあらわした。三代久経、四代忠宗のころから盛んに庶子が分立し、室町時代にはそれら庶家が独立して大名化する動きもあり、宗家としての島津氏の威令が及ばないということもあった。そして、勝久の代に忠良を迎え国事を託し、忠良の活躍によって、忠良の子貴久が宗家を継ぐことになった。この貴久が戦国島津氏の基礎を築くことになった。貴久のあとを継いだ嫡男の義久は、義弘・歳久・家久の三人の才能に溢れた弟たちの協力を得て、島津氏を九州最大の戦国大名に押し上げたのであった。

しかし、秀吉の島津征伐に敗れ、義久が薩摩一国を、弟義弘が大隅・日向二国を安堵された。そして、関ヶ原の合戦では西軍に属し、敗れたものの、薩摩・大隅、日向の一部を確保することに成功し、近世大名として存続。明治維新には、倒幕の中心勢力となり、徳川幕府と戦った。

—長宗我部氏—【四国】

植物紋—七つ酢漿草—



【図柄】主に用いられたのは花ではなくハート形の葉で、通常三斤一組で描かれる。一々四葉のものがある。四葉は田字草紋と酷似しているが、本来田字草の葉は酢漿草のようなハート形ではない。剣を添えたものが多く、「割」「覗き」等の意匠も多い。また、通常の酢漿草紋を奇数組、七つまで組み合わせたものがある。少数ながら実のみを用いた家紋もある。

酢漿草はありふれた雑草だが黄金草とも呼ばれ、公家・武家など多くの家が用いた。

酢漿草は「サンショウソウ」という生薬名でもあり、草をもんで傷口にあてると血止めの効果がある。また昔話に、酢漿草の葉をすりつぶして鏡を磨くと、想う人の顔が鏡のなかにあらわれるという話があるなど、古来、日常生活の中に役立ってきた。酢漿草の可愛らしいハート形の三つ葉は女性に好まれ、西洋では賢婦を象徴する草とされた。我が国でも酢漿草の葉を財布に入れておくと、いくら使っても減らないという迷信から黄金草とも呼ばれて大切にされてきた。

このようなめでたさと、一度根付くとなかなか根絶できないことが「家が」絶えない」に通じるとして家紋に用いられるようになったようだ。

土佐の長曾我部氏はその祖、泰能俊が土佐に下向するとき、別れの盃に酢漿草の葉が七枚浮いていたことから、それを瑞祥として「七つ酢漿草」を紋としたと伝えている。長曾我部氏は戦国時代に元親が出て四国全土を支配するほどの勢力を示した。しかし、秀吉の四国征伐に屈し、さらに関ヶ原の戦いに西軍に属したことで没落した。最期の当主盛親は、大阪の陣において、豊臣方に加担して敗れ、結局長曾我部氏は滅亡した。同時に「七つ酢漿草紋」も世に埋もれた。

てんやわんやの長宗我部一派

長宗我部氏の祖先については蘇我氏の子孫三、中国秦王朝の始皇帝の子孫と称する秦河勝の後裔など様々な説があるが、もとは土佐の在地豪族。長宗我部氏の初代とされる能俊が土佐に入った時期は諸説があり正確な所は不明であり、平安時代末期から鎌倉時代初期としかわからない。元は宗我部氏を自称したが、近隣にある香美郡にも同じく宗我部氏を名乗る一族があったため、長岡郡の一字をとって「長宗我部」とし、香美郡の宗我部氏は香宗我部を名乗るようにし、互いに両者を区別するようにしたと言われる。南北朝時代には、足利氏の一族で四国の守護職にあった細川家に属して南朝勢力と戦っていたが、戦国時代初頭の長宗我部兼序のとき、豪族の勢力争いで敗れて、一時は滅亡した。土佐中村に逃れた兼序の子の長宗我部国親は一条氏の支援を受けて長宗我部家を復興する。

そして国親の子の長宗我部元親の時代に、長宗我部家は最盛期を迎える。元親は土佐にあった本山氏や一条氏などを倒して一五七五年に土佐を統一する。さらに伊予国や阿波国、讃岐国等積極的に進出し、河野氏や三好氏を駆逐していき、一五八四年、四国統一を果たした。

しかし翌年、羽柴秀吉の四国征伐のために長宗我部家は土佐一国を領する大名に没落する。これより以後、長宗我部家の衰退が始まる。一五八六年には戸次川の戦いで元親の嫡男で聡明で知られていた長宗我部信親が戦死。そのため、長宗我部氏の家督をめぐる争いが起こり、一族の吉良親実を殺す肅清を行なったうえで、四男の長宗我部盛親に家督を譲ると決定した。このとき、次男の香川親和は憤死し、三男の津野親忠は幽閉されてしまった。

—毛利氏—【中国】



文字紋—一文字三つ星—

【図柄】一は物事の最初であり秀でている意味を持つ。また周易では「カタキナシ」と読むことから尚武的な意義を持つ。『太平記』には新田義興の軍勢に一文字紋を用いた者がいたことを記している。

毛利氏の祖大江氏は、菅原氏と同じく土師氏の後裔であることは、日本書記、六国史、新撰姓氏録などによって知られる。ところが、大江氏の場合、平城天皇の皇子阿保親王の子が本主であるとすることもあつた。しかし、これは、後世の仮冒といえものであろう。大江氏の本紋（定紋）「一文字に三つ星」は、阿保親王が一品の位であつたことに因み、一品の字を紋章化したといわれている。紋の上では、その出自を皇室の裔としているのである。また、「一文字に三つ星」紋は、各地の大江氏系氏族の代表紋ともなっている。「見聞諸家紋」を見ると、毛利氏の紋は「三つ星に吉文字」と出ている。これは三つ星に、嘉字である「吉」を「一文字」に替えて、配したものであろう。

しかし、正親町天皇から賜わつたという「十六葉菊」、足利將軍から賜つた「五七桐」や、元就が戦場で沢潟にとまつたトンボを見て大勝を得たことにちなんだ「沢潟」も用いている。その他にも「丸に矢筈」「鶴丸」「八本矢車」など、全部数えると100種近くにもなる。これらの紋は天皇の御前に伺候するときには「五七桐」を、元就の墓参には「沢潟」をというように。それぞれの場によって使い分けていたようだ。



【左…八本矢車、中央…立ち沢潟（おもだか）、右…十六葉菊】



【左…五七桐、右…抱き沢潟】

・沢潟意味

オモダカは、池や沢などに自生する水草で、愛らしい花が咲く。その昔この植物を「勝ち草」といつて、戦いに勝つことにかけていたという。葉の形が矢ジリに似ている、また、沢潟威の鑑ということばもあつて、「攻めても、守つてもよい」ということから勝ち草とよんだという。毛利氏も副紋にこの「沢潟紋」を使用している。（立ち沢潟）

戦国武将では、豊臣秀次、福島正則、毛利元就が用いた。

―三浦氏（足利氏）―【関東】

文様紋―三浦三つ引両―

【図柄】一、端に線を引いたもの。二本線を「引両」といい、一本の二つ引両、三本の三つ引両というのは習慣として用いたとする。

（『塩尻』）

二、引両の両は霊を表わし、霊とは太陽と月の日月精霊を表わし、

一つ引両は「日」、二つ引両は「月」を表わす。（『蒼梧隨筆』）

三、引両の両は龍を表わす。（『島国国史』）



横に、あるいは縦に一本、二本あるいは三本等と線を引いた紋がある。これらの紋は称して「引両」紋と呼ばれる。非常にシンプルでかつ斬新な武家ならではの家紋である。

引両紋は、龍を象ったものといわれている。すなわち一龍が「一つ引両」であり、二龍が「二つ引両」というのである。龍は古来、中国では天子の象徴として、我が国では雨の神として尊敬されてきた。家紋となったのも、そのような靈力にあやかろうとしたものと考えられるが、「両」が「龍」に通じることから、そのような説が成立したのであろう。

鎌倉時代初期、源氏の一門である足利氏・新田氏は將軍家の白幕に遠慮して、自らの陣幕に二本の線、あるいは一本の線を引いた。それが足利氏の「二つ引両」となり、新田氏の「一つ引両」の紋に変化していったのである。こちらの方が、「引両紋」の成立としては頷けるものがある。

徳川氏―【関東】



植物紋―三つ葉葵―

【図柄】家紋に使用されたフタバアオイは、その名の通り葉が二枚であり、上賀茂神社、下鴨神社の神紋も、二つの葉で描かれている。原則的に二葉で描かれるべき紋章であるが徳川氏が用いる三つ葉葵は、デフォルメされて原則の縛りを離れ紋章化が進んだ姿を呈している。戦国期に松平自身が作り出した比較的新しい文様と思われる。

葵は見事な大輪の花を付ける立葵を連想させるが、この紋のモデルとなったのはウマノスズクサ科のフタバアオイで山地の樹下に見える多年草である。フタバアオイは賀茂葵とも呼ばれその名の通り鴨県主の一族が社家となった上賀茂神社、下鴨神社の紋章である。京都三大祭りとして有名な「葵祭」では、遅くとも平安時代には葵紋が使用されていたという。鴨氏の氏神である賀茂別雷神が神山に降臨した時、「神託により奥山の賢木を取り阿礼に立て、種々の彩色を飾り、走馬を行い、葵楓の鬘を装って祭を行ったのが、賀茂神社と葵の結びつきの最初であるという。13世紀中頃の『文永賀茂祭絵巻』には調度器具に葵が描かれており、家紋となつたのはそれ以降と言われる。戦国時代に入ると、三河の国から興った徳川将軍が三つ葉葵紋を定紋にした。

葵紋にはミズアオイ科の水葵紋もある。フタバアオイとミズアオイは植物としては全く別の植物であるが、家紋としては、その使用家や意義等を考えると殆ど同類として扱われ使用されていたと判断すべきである。

徳川将軍葵を独り占めにする

徳川家の三つ葉葵の原形は、二葉葵といわれている。この二葉葵を紋章とするのは、だいたいが加茂明神信仰から出ている。二葉葵は京都の賀茂神社の神事に用いられてきやもので、別名カモアオイともいわれる。そして、加茂祭には必ずこの二葉葵を恒例の神事として用いたことから、この祭を葵祭という。

葵は、加茂祭に用いた零草であるため、この神を信仰した人々がこの植物を神聖視し、やがて、これを家紋としたことは当然のなりゆきと言える。『文永加茂祭絵巻』に、神事の調度に葵紋が用いられているのが見られる。このころから家紋として用いたようである。

葵紋が武家などの家紋となったのはかなり古く、『見聞諸家紋』によると、三河国の松平・本多・伊奈・島田氏が戦国時代前期ころから用いていたとある。この中で、本多氏の場合「本多縫殿助正忠、先祖賀茂神社職也、依つて立葵を以つて家紋と為す」と『本多家譜』にある。

このことから、本多氏の祖先が賀茂神社の神官の出であることにちなんだことが知られる。

家康は開幕後、自家の權威保存に努め、「三つ葉葵」の使用を厳しく制限した。

上杉氏 —【東北】



植物紋—上杉笹（竹に二羽飛雀）—

【図柄】上杉氏使用紋二羽の雀を九枚笹の上に重ねる。

笹は葉だけを描いたものと、茎を描いた根笹に分けられる。葉だけのものはその枚数が一〜二五枚まであり、頭あわせで寄せる九枚笹が非常に多い。根笹には左右対称のものと、左右で葉の数を違えたものがあり、どちらにも雀や雪を添えた意匠も多くある。

笹・竹はイネ科タケ亜科の植物で、両者は区別せずに認識される場合も多く、家紋でも同じように扱われることが多い。一般に大型のものを竹、小型のものを笹と言う。竹は里山に多く、食糧や建材として欠かせなかった。竹や笹は神代より神聖な植物とされ、『古事記』には天照大神が天の岩戸に隠れた時、技芸の神様といわれるアマノウズメが束ねた笹を手に持ち、天の岩戸の前で踊る様子が描かれる。現代でも地鎮祭で立てられる忌竹や七夕で短冊を飾る等神事で使用される。松竹梅といわれ、松竹は寒中でも退色せず、梅は寒中に咲くことから歳三友と称され「清廉潔白・節操」を表わして慶ばれて盛んに絵等に描かれた。

上杉氏の笹可愛くない雀

上杉氏は藤原北家勧修寺流で、勧修寺流の一門は「竹に雀（竹輪に飛び雀）」を家紋として用い、上杉氏も「竹に雀」を家紋とした。

「竹に二羽飛雀」の家紋は、憲政から上杉氏の家督と関東官領職を相続した時に、譲られたものである。また、周防の戦国大名大内氏も上杉氏から「竹に三雀」を譲られている。

「竹に雀」は仙台藩主伊達氏の家紋としても有名である。これは、越後守護の上杉定実が伊達氏から養子を迎えようとしたとき、「竹に雀紋」を婿引出物のひとつとして贈った。これが、のちに伊達氏の定紋となった「仙台笹紋」のはじめである。

武家の用いた「竹に雀紋」は、すべて二羽の雀が対いあい、くちばしは阿（開く）・吽（閉じる）の形となっている。目もつばらに可愛らしく描かず、怒らしたように描いている。武家としてのいかつさを表現したもので、家紋にあらわれた武家気質といえる。

伊達氏——【東北】

天文紋——九曜



【図柄】星紋は一〇七個の組み合わせがあり、円形に配列することが多く、稀に直線状、ピラミッド状に描くものもある。

文様紋——堅三つ引両



【図柄】一〇七の線で描かれ、縦、横、少数ながら斜めに描かれるものがある。

植物紋——竹に向かい雀



【図柄】竹は一〇三本直立させたものがあり、稀に五本と一〇本のものもある。丸を描いた竹輪も多い。また筍や雀を添えたものも極めて多い。

家紋持ちの伊達氏

伊達氏は戦国大名のなかでも、もともと家紋の数が多い家である。伊達氏の使用紋を全部あげてみると、竹に雀、堅三つ引両、九曜、十六葉菊、五七桐、蟹牡丹、雪に薄、等である。

このように紋が多いのは、それだけ歴史が長く、伝統がある家であることの証でもある。紋にはそれぞれいわくがある。たとえば「三つ引両」は始祖が源頼朝から下賜され、「菊」は皇室から賜ったというが、ともに確証はない。また伊達氏は桓武平氏流伊佐氏の後裔とする説もあり、それを語っている紋が「九曜」である。また、「竹に雀」は上杉氏に養子を入れたときに頂戴したものだ。伊達氏はこれらの紋をそれぞれ適当に使い分けているのである。

「菊」は皇室、「桐」は豊臣家、「牡丹」は近衛家、「三つ引両」は清和源氏、「九曜」は桓武平氏、「竹に雀」は藤原氏流上杉氏にというようにそのルーツはどこにでも結び付くように用いている。即ち、戦乱の時代を生き抜く処世のシルシに家紋を利用したのである。

そのうち、もともと人気があり、のちに定紋となったのが「竹に雀」紋であった。「竹に雀」紋の露は、朝であることを示し、左右対称でないことは、世に二つと同じものがないことを表わしと、家紋に深奥な意味を秘めているのである。

伊達氏の他の紋



十六葉菊



五七桐



蟹牡丹



雪に薄

甲信越・北陸、東海、近畿地方の家紋と
それを掲げた武将



浅井氏——【近畿】



文様紋——三つ盛り亀甲——

【図柄】正六角形で、外周が一重のものと二重のものが殆どで、単に亀甲という場合は二重のものをいう。組み合わせは一つ、又は三つのものが多く、稀に七つのものが見られる。また、単独での使用よりも外郭として中に他の紋を組み入れる場合が多く、無数の組み合わせが存在する。

亀甲は紙の甲羅に似た正六角形の連続文様から紋章化したものである。エジプトの第一九王朝（BC一二〇五頃）のサブタハ王墓の天井画にも見ることが出来、古代より広く世界中で使用されたことがわかる。日本には大陸から伝わってきたものと思われ、五世紀以降の古墳から出土する円頭大刀柄頭に亀甲繁文の象嵌が多く見られる。その後、『年中行事絵巻』や『伴大納言絵巻』等の絵巻物によって衣裳や調度品に使用された様子が見られる。単純明快な幾何学的な美しさと長寿の亀の甲羅を連想させるために端祥的な意義で紋章化したのだろう。

長寿を祈って用いた亀甲紋。だけど浅井氏の結末は…

浅井氏の出自については、一般に三条公綱落胤説というものが流布している。これは、正親町三条実雅の長子公綱が嘉吉年間（一五二一～二二）勅勘によって京極氏に預けられ、その所領浅井郡丁野村に蟄居中に一子をもうけ、公綱の帰洛後京極氏に仕えて浅井重政を名乗ったというものだ。

まず、嘉吉年間以後、はじめて浅井氏を称するようになったということについては、建保三年（一二三二）の銘とともに浅井氏の名のある長福寺本尊薬師如来背銘、寛喜三年（一二三三）の年号を持つ円満寺の古鐘銘にも浅井氏の名賀みえることによって否定される。

実態は下剋上によって守護京極氏の座を奪い、成り上がりによって戦国大名化した浅井氏が、その出自をたまたま流寓の貴神に求めただけで、東浅井郡の郡名が示すように、その地の郡司クラスの後裔であろうと考えるのが妥当のようだ。浅井氏が資料的に明確になっくるのは、亮政からで、この亮政と子の久政、孫長政を浅井三代の名で呼んでいる。

ところで、亮政は浅井氏の嫡流ではなく、浅井直種の子である。浅井惣領家直政に女子一人しかなかったため、それと結婚して浅井の惣領家を継いだ。久政は『浅井三代記』には暗愚な武将として描かれているが、その実、領内の用水争論を調停するなど、戦国大名の基盤を作っていたのである。その子長政の代になって、それまで江南六角氏の傘下に置かれていた状態を脱して自立し、それまで六角義賢の「賢」の字をつけて賢政といていたのを長政と改称している。永禄四年のことであった。

浅井氏は、大永三年から始まる江北の国人一揆によって守護を交替させ、ついに大永五年には国人一揆の盟主浅見貞則をも倒し、長政に至って、戦国大名化し、小谷城を本拠に北近江に武威をふるった。さらに信長の妹お市も方を娶り、同盟関係を結んだ。しかし、越前朝倉氏との関係から信長に背き、姉川の合戦を経て、天正元年八月に滅亡した。

豊臣氏―【近畿】

植物紋―五七桐―



【図柄】 通常三葉の上に三本の花序が描かれ、その花の数によって呼称が変わる。「割」「合わせ」「車」等の変形がある。白桐は大きく細長い紫色の花を下向きに咲かせるが、その花を連想させる意匠の家紋は使用例が見られない。また白桐は若葉が出る前に花を咲かせることから使用される文様とそぐわない。

桐は梧桐といひアオギリ科の落葉広葉樹で、初夏に黄白色の小花をつける。中国では聖王が世に誕生する時に現れる鳳凰が住む木とされる。実際の文様のデザインは、梧桐は古今多くの詩人に詠まれていた。日本において国家を代表する紋章で近現代でも政府の慣例的な紋章となっている。梅、藤、木瓜、等とともに五大家紋のうちのひとつである。

豊臣氏桐紋使つてキリキリマイ

卑賤の身から、一代にして天下統一を成し遂げた秀吉の生涯は、出世物語として有名である。その出自については、天下人となった段階でさまざまな作偽がなされている。

秀吉の父弥右衛門は、織田信長の父信秀の鉄砲足軽だったという。信秀の時代に鉄砲が尾張にまで普及していたことは考えられないので、鉄砲足軽というのはおかしい。しかし、ただの足軽ということであれば別である。弥右衛門と死別したとき、秀吉は七歳であった。その後継父として竹阿弥がはいってくる。竹阿弥は秀吉の弟小一郎秀長の父とされるが、秀長の年齢を考えると、弥右衛門が生きている間に生まれた計算になる。秀長の父に関しては再検討が必要ようだ。秀吉はこの弟秀長にずいぶん助けられている。秀長の補佐がなければ、いかに秀吉でも、あれだけの仕事はやりおせなかったものと思われる。ときには分身として、ときには暴走しがちな秀吉のブレーキ役として、補佐役の姿を示している。かれの死後、秀吉が無謀な朝鮮への侵略戦争に向かって暴走しはじめたことは周知の事実である。ブレーキ役の秀長を失ったことが、豊臣政権の崩壊をはやめたことは間違いないようだ。いずれにしても、秀吉は織田信長に仕え、その才覚をもつて出世街道をひた走り、信長が明智光秀の手によって本能寺で横死したあとを受けて、光秀との山崎の合戦、柴田勝家との賤ヶ岳の合戦を制し、さらに小牧長久手の戦いでは、織田信雄と徳川家康の連合軍と戦い、天下人へと駆け上がった。

秀吉は子に恵まれず、信長の四男秀勝をはじめ、姉瑞竜院の子秀次・秀勝らを養子としていたが、のちに側室淀殿から鶴松と秀頼の二人が生まれている。秀次は秀吉の長男鶴松が夭折したことから、秀吉の後継者として閥白となった。ところが秀頼が生まれると謀反の嫌疑をかけられて追放され、次いで自殺を命ぜられた。そして、一族はすべて処刑された。

秀吉は晩年、再三にわたって有力大名から誓書を取り、秀頼に対して異心のないことを誓わせたが、ついに関ヶ原の合戦に西軍は敗れ、豊臣家はわずかに摂津・河内・和泉の六十万石を領する一大名に転落し、徳川秀忠の娘千姫との結婚により徳川家との同盟関係が保たれるかにみえたものの、慶長十九年(1644)の大坂冬の陣、翌年の夏の陣で徳川軍に攻められ、秀頼は母淀殿とともに大坂城で自殺。豊臣家ははかなく滅んでしまった。

佐藤担当分

—朝倉氏—【甲信越・北陸】



文様紋—三つ盛木瓜—

【図柄】 鑑状の外郭、その内側に外郭よりも細い鑑状の内郭、中心部の三つの部分からなる。環状部分の数は三〜八つの組み合わせがあり、内郭の鑑は省略される場合がある。中心部の基本形は通常外郭の数と同じ花卉数の唐花が入るが、他の文様が入るものも多い。

織田氏と同じ意匠なのに…

朝倉氏は開化天皇または孝徳天皇の後裔といわれている。はじめ日下部を姓としたが、平安時代末期に但馬国朝倉に居住し、はじめて朝倉氏を称したという。

下って南北朝時代に広景が、足利方の斯波高経の被官となり、越前で戦功を挙げ、坂井郡黒丸城に拠り斯波氏の目代となって活躍している。朝倉氏は広景以後家景の代まで黒丸城を本拠とし、守護代甲斐氏などと争いながら、坂井郡・足羽郡に勢力を伸ばしていった。

その後孝景が現われ、斯波氏の内紛に乗じて、越前守護となり、一乗谷に城を構えて戦国大名化に成功した。孝景は応仁の乱では西軍に加わり、文明十三年、斯波氏に代わって越前守護となった。一乗谷城にはそれから氏景・貞景・孝景・義景の五代が住み、越前に戦国大名領国制を展開することになる。初代の孝景が有名な「朝倉敏景十七ヶ条」の制定者で、朝倉氏中興の祖というか、戦国朝倉氏の基礎を築いた人物である。

初代孝景の子教景は宗滴と号し、五代義景にいたるまで後見として活躍し、加賀・能登・越中の一方向一揆と戦うなど朝倉五代をその身で生き抜いた人物である。七十九歳という高齢でおかつ合戦に参加したという話は有名で、朝倉氏もこの宗滴が弘治元年に死んだからは、歯止めを失った義景の、奢りをきわめた生活が始まり、衰えを見せるようになる。宗滴教景が話したことを家臣が書き留めた「朝倉宗滴話記」は、家訓としても名高い。

義景は京風の文化を一乗谷に移し、足利義昭も一時その庇護を受けたほどで、一乗谷文化あるいは朝倉文化の名で山口の大内文化などとともに著名だ。

元亀元年、織田信長は朝倉義景を攻めるため兵を越前に進めた。ところが信長の妹を嫁がせ同盟関係を結んでいたはずの北近江浅井長政が信長に反旗を翻したのである。ここにおいて浅井・朝倉は、信長の前に共同の敵として立ち現われることになった。この年六月、近江の姉川を挟んでいわゆる姉川の合戦が行われ、義景は一族の景健に兵一万をつけて遣わしたが敗北。天正元年、信長は古谷に来ていた義景の浅井援兵を追って越前に侵入し、ついに義景は自害した。越前に勢力を誇った朝倉氏も、こうして織田信長によって滅ぼされてしまった。

織田氏——【東海】



文様紋—織田木瓜—

【図柄】鑑状の外郭、その内側に外郭よりも細い鑑状の内郭、中心部の三つの部分からなる。環状部分の数は三〜八つの組み合わせがあり、内郭の鑑は省略される場合がある。中心部の基本形は通常外郭の数と同じ花卉数の唐花が入るが、他の文様が入るものも多い。

木瓜は御簾の上部につく絹織物の帽額に付けられた円形の文様で、帽額の名にちなみ木瓜と呼ばれた。木瓜のモチーフとなった帽額に付けられた文様は窠（そ）といい、地上にある鳥の巢を象ったものとされ窠紋ともいわれる。中国では唐代に官服の文様として用いられたといい、日本での初見は『続日本記』慶雲元年（七〇四）十一月庚寅（八日）条に「遣從五位上忌部宿称子首・供幣帛。鳳凰鏡。窠子綿干伊勢大神宮」と記され伊勢神宮に献納されたものに窠文様を織り込んだ錦があったことがわかる。正倉院には『木瓜文文章綱錦』に窠文様を見ることが出来、殆どの絵巻物に描かれている。多く使用される家紋で五大家紋の一つに数えられる。

あの有名な織田氏誕生秘話

織田氏は各種系図によれば、平重盛の子・親実に始まるとされる。すなわち桓武平氏である。しかし、信長以前の織田氏はもちろん、信長自身も初期のころは藤原氏で通っていた。足利氏に代わり天下を取ることを内外に宣言するころから平姓を名乗るようになったものである。つまり源平交代思想に規定されて、先祖を平氏の落胤に仕立て上げたものと考えられる。やはり越前織田庄に住む庄官織田氏の末裔が、守護斯波氏の被官となつて成長していったものとみるのが自然である。明徳四年（1393）六月十七日付で劍神社室前に奉納した藤原信昌・兵庫助得広父子置文は、織田家の先祖に關係するものとして注目されている。織田庄は皇室領莊園であるが、その莊官か、あるいは劍神社の神官から出発して、しだいに土豪として成長したものである。神官出身とすれば、本姓は忌部氏ではなかったか、とする説もある。さらに、尾張の土豪前野氏の子孫吉田氏の土蔵から発見された「武功夜話」と呼ばれる前野家文書から、尾張織田氏の系譜が明らかにされつつある。

応永七年（1400）、室町幕府の管領家で越前守護であった斯波義教（義重）が尾張の守護を兼ね、兵庫助得広の子（あるいは同族）と思われる、織田伊勢入道常松（信広・郷広）が尾張守護代に拔擢された。常松はおそらくはやくから斯波氏の被官となつていたものだろう。こうして尾張の織田氏は誕生した。ただし、斯波氏は幕府の重職にあつたことから、常松も在京することが多く、常松の弟とみられる常竹が又守護代となった。常松の系統は、のち大和守と称することが多い。尾張の織田氏は、当初から常松・常竹の二流に分かれてスタートしたのである。

信長の家系の織田氏は、それら守護代織田氏の一族だった。一族とはいえ、二つに分かれた守護代家の一方織田大和守家の老臣に過ぎない存在だった。したがって、越前にいた庄官といい、尾張での位置といい、平氏後裔説が、後年の創作であることを物語るものである。

中国、四国、九州地方の家紋と
それを掲げた武将



—大友氏—【九州】

器材紋—抱き杏葉—



【図柄】茗荷紋に似ているが杏葉には花や葉脈が無く、先端が内側に曲がる。「抱き」が多く、他に「違い」「三つ追い」等もある。



戦国大名大友氏の定紋は「杏葉」で、それとは別に「乾卦」という珍しい家紋も用いた。のちに、「五七の桐」も用いるようになった。「杏葉」は、大友氏はもとより、門司・三池・厳島大宮司ら大友氏と縁のある一族が用いたことで有名なものである。

杏葉紋は、シルクロードから中国を渡り、わが国に來た馬の阿克セサリーである。その模様が茗荷に似ていることから、江戸時代は間違つて茗荷紋と記述した書物が多い。この紋は、はじめ閑院家や中御門家の一門が用いた。三池氏の系図には、鎌倉時代より用いたように記されているが、武士の間では足利時代に広まったようだ。形が珍しく異国的であることと、その不思議な形に一種の呪符的な感をもったのではなからうか。大友氏はこの紋を大いに愛好し、功績のある部下に与え「同紋衆」として特別扱いにしたことはよく知られ、北九州の武将の憧れの紋となつたのである。

一方の「乾卦」は「三つ引両」に間違われることが多いが、八卦の一つで乾は「ケン」とよむ。陽性・支配するものなどを表し、「おおいに通る。ただしきに利あり」と解される。また、天をも表すことから「乾为天」とも呼ばれる。人間では父親・君主・英雄などを表し、まことにめでたい卦である。これらのことから、大友氏は「乾」を家紋としたのであろう。

過酷な運命の一族、大友氏

鎌倉時代から戦国時代にかけて、九州の豊後国（現大分県）を本拠とした一族。豊後・筑前・筑後など北九州を支配した守護職・守護大名。戦国時代には豊後の戦国大名に成長するが、豊臣政権期に改易された。

氏泰のとき、足利尊氏に従い、豊後のほか、豊前・筑後の守護職を得、北九州きつての守護大名になった。

戦国期、義長・義鑑・義鎮の三代で、戦国大名としての成長を遂げ、薩摩の島津氏、肥前の竜造寺氏と九州を三分する勢いであつた。なかでも大友氏の全盛を築いたのは義鎮で、豊後、豊前・筑後・筑前・肥後・肥前の六ヶ国と伊予・日向の半国に大名領国制を展開した。

義鎮は入道名の宗麟の方が知られている。有馬晴信・大村純忠とならぶキリシタン大名でもあつた。天正六年、豊後より南下の軍を起こしたが、日向の高城（耳川合戦）で島津氏と戦い敗れ、大友氏は守勢に立たされることになった。そして天正十三年、筑後において龍造寺・島津両軍の挟み撃ちにあつて大友軍は敗北した。翌十四年、島津氏は大友氏の本拠豊後に突入した。大友軍は島津氏の全面攻撃をささえきれず、豊後は島津氏の支配下に入った。

その子吉統は秀吉に属した。しかし、朝鮮の役での失態をせめられて、庶領は没収され、わずかに徳川旗本として家名を保った。